「かかってこい！」

筒　井　友　弥

「不敵な笑み」．非常なる無礼を承知で，私はあえて，志田先生の微笑をこう形容したい．1995 年，本学ドイツ語学科に入学した私は，「ドイツ語文法」の授業で志田先生に学んだ．今から 18 年前のことで，その授業内容の全てを明瞭に記憶しているなどと言えば，正直嘘になる．ただ一方で，長い年月が過ぎようと，その後も全く薄れることなく脳裏に焼き付いていることもある．それが，授業で何度も先生が見せた「不敵な笑み」である．私が遅刻してしまったとき，授業中の睡魔にどうしても負けてしまったとき,先生の質問にしっかり答えられなかったとき,その度に，先生が私に向けた，まさしく不敵でありながら，しかしなんとも深みのある先生独特の「にやり」である．当時，それでも私はやはりまだ子供で，その笑みの本当の温かさを理解できず，ただただ自分が馬鹿にされた，できない自分を蔑まれたと感じて，一教員としての先生の行為に懐疑心さえ抱くこともあった．

2009 年，本学ドイツ語学科に奉職した私は，今や，「ドイツ語文法」の授業を担当している．志田先生が体調を崩されて，急きょ，私が代講することになったのがきっかけである．奉職した当初，（畏れ多くも）同僚となった私に対しても，やはり先生の「にやり」を見ない日はなかった．キャンパスで挨拶を交わすとき，会議で誤ったことを言ってしまったとき，先生の指示にしっかり応えられなかったとき，その度に，先生はいつも，口角を少し吊り上げて，私に不敵な笑みを浮かべるのである．

ご入院されてから 1 年が過ぎ，先生が一時大学に復帰された期間があった．まさに奇跡としか表現できないほどのご快復で，毎日，大学の公務や授業を精力的にこなされていた．そんな折，ある懇親会の帰り道，偶然先生と私だけが同じ方向に歩いて向かうこととなり，すると先生は突然，「おい，もう一軒行くか」とおっしゃった．「はい」．これが，先生との最初で最後の二人呑みとなった．連れて行っていただいた祇園の小料理屋で，先生はずっと女将さんと会話を嗜んでおられた．私の存

在などまるで無であるかのように．時折の沈黙とともに，酌だけが先生と私の無言の会話となっていたとき,突然また先生がおっしゃった.「おい,腕相撲でもするか」.「はい」. 決して大柄で筋肉隆々といった体格とは表せない，ましてや退院されたばかりのお身体のどこにあれだけの力が秘められていたのか，私は呆気なく完敗し，私を負かしたあと，先生ははち切れんばかりに嬉しそうなお顔で，あの不敵な笑みを私に浴びせたのである．しかし，この瞬間の，何とも言えない心地よい感覚を私は一生忘れることはないだろう．初めて触れた先生の手のぬくもりを，大きな大きな愛に満ち溢れた先生の笑みを．このとき初めて,「同僚」として少しだけ認めてもらえた気がして, 無言の笑みに,「どうした！ お前はそんなもんか. かかってこい！ いつでも相手してやるぞ」, そう言われているようで, そしてそれが, 先生からの「がんばれよ！」という励ましに思えて，たまらなく嬉しく思わず泣きそうになった．本当は，酒一滴すらお身体に障る時期であったと知ったのは，その数か月後，先生が突然逝かれたあとのことだった．

志田先生, まだまだ話し足りません. 全てはこれからではありませんか！ お話したいことがたくさんあるのです．そして何より，もう一度腕相撲をやらせてください．きっと，また呆気なく私が負けると思います．そしたらまた，私を不敵に笑ってやってください. 温かく深く，何よりも強く優しい微笑で,「いつでもかかってこい！」と．